

イザヤ書 45 章 1-7 節

テサロニケの信徒への手紙一 1 章 1-10 節

マタイによる福音書 22 章 15-22 節

本日は礼拝後に臨時の堅信受領者総会を開きます。わたしたちが1961年から使い続けてきた聖堂の修繕を行うか否かについて決定します。皆さまと気持ちを合わせ、祈りつつ歩む道を定めたいと思います。

本日から使徒書は、「テサロニケの信徒への手紙一」です。この手紙が連続して日課となるのは、A年のこの時期だけです。この手紙は、現存するパウロの手紙の中で、また新約文書の中で、最も古い文書とされています。そのような手紙から、本日一つの決断をするわたしたちも学びたいと思います。

パウロは、49年からの第二回伝道旅行の際に、シルワノとテモテと共に、フィリピからテサロニケにきて、教会を建てます。パウロは、この教会を再び訪れようとはしますが、実現せず、同労者のテモテからの教会について報告を受けます。そして、喜びと感謝に満たされ、その喜びを伝えるため、また教会からの質問に答えるために、この手紙を書いたのです。書かれた時期と場所は、正確にはわかりませんが、50年頃にコリントで書かれたと考えられます。それは、教会という集まりがこの世界に誕生して、まだ約20年しか経過していない頃に書かれたということです。

この時期の教会は、固有の建物はありません。誰かの家の一部屋を借りて集まっていた状態です。教会という言葉の直訳が「集会」である通りです。教会の建てられたテサロニケという町は、エーゲ海のテルメ湾に面する港湾都市で、町の起源は紀元前315年までさかのぼり、非常に人口の多い都市であったようです。パウロがテサロニケで教会を始めたとき、テサロニケは歴史もあり、経済的にも栄えている都市でした。ユダヤ人も多く住んでおり、パウロは、そのユダヤ人の集まりを足掛かりにして、宣教活動をしたのです。またその集まりには、ユダヤ人だけではなく、ユダヤ教に興味を持つ、異邦人もいたようです。

これらのことかわかるのは、最初の教会は、都市部において、ユダヤ教の人々の集まりから始まり、次第に、ユダヤ人の枠組みを超えて、信じるようになった人々の家で集まるようになったということです。イエス様の活動は、イスラエル地域をほとんど出ませんでした。町や村、そしてそこにある会堂や家を中心に活動しました。その意味では、最初の教会も同じであったといえるのです。

さて、この手紙全体は、二つの部分に分かれます。「感謝と励ましと祈り」を中心とした1章から3章までと、教会からの質問に答えている、4章と5章です。本日の日課は、前半部分です。手紙の冒頭1節「パウロとシルワノとテモテから、父なる神と主イエス・キリストにあるテサロニケの教会へ。恵みと平和があなたがたにありますように」と、当時の普通の手紙の挨拶形式と同じように始まっています。しかし、「教会（集会）」も「恵みと平和」も、単なる挨拶を超

えて、それらが主なる神様によるものと、受けとられていたと思います。2節「**私たちは、祈りの度に、あなたがたを思い起こし、あなたがた一同について、いつも神に感謝しています**」は、「祈り」が、誰かを思い起こす行為であることを示しています。わたしたちの代祷の起源を示すような一文です。また教会が祈り支えあう集まりであることをも示しています。3節「**あなたがたが信仰の働きを示し、愛のために労苦し、また、私たちの主イエス・キリストに希望を置いて忍耐していることを、絶えず父なる神の前に思い起こしているのです**」も大切なことを示しています。教会に集められる人々の働きとは、「信仰の働き」であり、それは「主なる神様の愛」を示すためであり、そのようにするのは、主イエス・キリスト（の出来事）に「希望」を置くからです。そして、その希望とは、永遠の命への希望にほかなりません。4節「**神に愛されているきょうだいたち、私たちは、あなたがたが神に選ばれたことを知っています**」と、パウロは「**選び**」という言葉を用いています。その意味するところは、イスラエルの選びと同じく、教会とは、主なる神様が呼びかけて集めた集まりであるということです。5節「**私たちの福音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と聖霊と強い確信とによったからです。私たちがあなたがたのところで、あなたがたのためにどのように振る舞ったかは、ご存じのとおりです**」。ここでパウロは、自分の宣教の成果が、自分の努力だけではなく、聖霊の働きによることを告げています。後半部分「**ご存じのとおり**」とは、当事者同士しかわからない内容です。6、7節「**そしてあなたがたは、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、私たちと主に倣う者となりました。こうして、マケドニアとアカイアにいるすべての信者の模範となったのです**」（1：6-7）において、パウロは「**主に倣う者**」という表現を用います。それは「**模倣すること**」「**真似すること**」です。なぜそう表現するのか、それはイエス様ご自身が、弟子たちに対して、自分の真似をすることを求めたからです。パウロは、そのような弟子たちと同じように、イエス様の真似をしていたのでした。

9～10節は長い一文です。そこでは、偶像を拝んでいた異邦人も主なる神様を信じていたユダヤ人も、ともに教会で「**御子が天から来られるのを待ち望む**」こと、すなわち十字架にしが復活したイエス様が、再び来られること（終末）を待ち望むことが大切であると示しています。

本日の箇所から示されるのは、具体的に誰かを思い浮かべて祈ることの大切さです。それは祈る私たち自身が、祈り支えられていることをも意味します。また信仰の先輩たちの姿を真似していくことです。それは、自分たちも後に従う誰かの模範となるためです。そして、イエス様が示して下さった変わらない永遠の命の希望、すなわち復活の希望を持ち続けることです。この希望がある限り、この世界がどのようなであっても、それがすべてではないという希望を、世界に示し続けられるからです。この務めをわたしたちが果たし続ける限り、この世界にどのようなことがあっても（もちろん、今起こっている悲しい戦いの出来事が一日も早く終わることを心から願いますが）、わたしたちを集められた主なる神様が、わたしたちの教会を守り導いてくださると思います。